

核の脅威

核兵器の被害の甚大さが明らかになつてから、良識ある人々は廃絶への可能性を模索し続けてきました。しかし、廃絶はいまだに達成できず、むしろ保有国は増え続けています。核兵器廃絶のために必要な条件を考えます。



廃絶ではなくだ 将来の目標最優先課題だ

研究員 小沼通二



PROFILE

1931年東京出身。慶應義塾大学、武藏工業大学名誉教授。専門は物理学。理学博士。元日本物理学会会長。元パグウォッシュ会議評議員

民の健康にも被害が出ている。米国のスリーマイル、ソ連のチエルノブイリ、日本の柏崎での事故は、原子力利用のマイナス面を示した。

事故は減らすことはできても、絶対ゼロにすることはできない。万一の事故の被害が極めて大きくなりうることは忘れてはいけない。大量破壊兵器の中で、化学兵器、生物兵器の禁止はできたのに、核兵器廃絶はまだできていない。逆に核兵器誕生から、平均すると五年ごとに核兵器保有国が増えてきた。インドは平和利用の国際協力の下で核兵器を作った。

放射線治療につかう放射線は核（原子核）から出てくる。このように核には役に立つ面があるが、一方で核兵器は広島・長崎・ビキニで惨害を与えた。被害は六〇年以上たつた今日まで続いている。これが放射能被害の実態なのだ。世界各地の核兵器実験場周辺の住

核への依存を続ける限り、核兵器の保有と使用の可能性は増大する。変化が必ず起こることは、歴史の教訓だ。核の脅威をなくす努力は、最優先課題である。

世界各国が協力して 安全な地域を作る

所員、国際学部教授 高原孝生



昨年のノーベル平和賞受賞者アル・ゴアは、「不都合な真実」の中で繰り返し、地球温暖化はモラル・イッシュ이다、と述べています。この課題にどう向き合うかでその人の生きる姿勢が問われるような基本問題だ、というニュアンスでしょうか。ゴアは、科学者が一致して指摘する深刻な問題をあえて先送りする政治家たちの無責任を批判し、また人々の無関心の原因の一つが少数の既得権益層のメディア操作にあることを、鋭く指弾しています。実は核問題の構造も、これによく似ています。使えない兵器と言われながら、核兵器の全面禁止と完全廃棄が遅れているのは、まさに非人道的で危険な核兵器に依存することによって自分たちの安全を守ろうという、倒錯した政策が再生産され続けているからです。この「核の傘」神話から脱け出し、国々が協力して安全な地域を作ることで、初めて日本、北東アジア、そして地球の未来が開けます。平和研究はそのためのものに他なりません。



PROFILE
1954年神戸生まれ。国際政治学専攻。東京大学助手、立教大学助手を経て、明治学院大学に着任。国際学部教授。元日本平和学会副会長